魔胎都市 Xth
Sakuya-Chronicle

魔胎都市 Xth

Sakuya-Chronicle

魔胎都市 Xth
Sakuya-Chronicle
黒イ都
Radical Dream
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

魔胎都市 Xth

Sakuya-Chronicle

黒イ都
Radical Dream

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

黒イ都P
魔胎都市 Xth
Sakuya-Chronicle
フルカラーイラストで綴る魔胎都市シリーズ新作ノベル
これまで語られることのなかった円城咲耶の過去調教がついに……！
感度増強、乳責め、乳改造、搾乳、連続絶頂、焦らし責め、触手、粘液、乳嬲虫――
魔界調教師の淫卑極まる快楽調教の嵐に、最強の退魔師は耐えられるのか……！？

魔胎都市 Xth
Sakuya-Chronicle
黒イ都

魔胎都市 Xth　—Sakuya　Chronicle—

●目次

一章　十年の妄執.　……０１
ニ章　触手摩擦無限地獄　……５２
幕間　……８９

●登場人物

円城咲耶

年若くして現役最強の誉れも高い天才退魔師。
生まれ持った類稀なる霊力を用い、幼少の頃より数え切れぬほどの妖魔を浄滅してきた。
真摯で高潔な人柄で、気品に溢れ、常に冷静沈着。
自身の力に決して驕らず、日々弛まぬ研鑽を続けている。
自他ともに厳しく接するが性根は優しく、面倒見のよさから同僚たちにも慕われている。
戦闘においては無数の呪符を使用した霊術と、神剣『アグネア』を用いた剣術、および雷の神術を使用する。

魔界調教師

謎多き淫魔の調教師。
退魔師を捉え、調教し、魔界の快楽に溺れさせ、肉欲の奴隷へと堕とす事を生業としている。
その毒牙にかかった退魔師は数知れず、そのすべてが日常生活を送れないほどの肉奴隷へと堕してしまっている。それゆえ、退魔師の天敵とも呼ばれている。
その唯一の例外が咲耶であり、十年前に少女時代の咲耶を囚え調教するも、堕とす前に脱走されている。
淫魔の中でも特異な存在で、強大な力や高い地位を持つと思われるが、その正体は謎に包まれている。

一章　十年の妄執

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

おぞましい肉部屋の中に、女の喘ぎ声が木霊する。

「く、くぅ……ふ、ん……んんっ！」

湧き上がる情欲に懊悩しながら、それを必死で耐え、噛み殺さんとする――

強靭な意志力と克己心を感じさせる、抵抗の声。

「ふうぅ……ん、んんっ！　ふぅ、く、んん……！」

だが、それでも殺しきれずに漏れてしまった――否定しきれない「おんな」の本音は、それがゆえにひどく淫猥だった。

（くっ……い、いけません。このようなものに流されては……）

自らの零した声の艶めかしさに恥じらいながら、きゅっと唇を噛みしめる。

美しい女だった。

年の頃は二十を過ぎた辺りか。

顕に晒された肉肌は珠のように瑞々しく、若々しく輝いている。ゆうにメートルを超える溢れんばかりの巨乳峰は、その質量に負けることなく凛々しく張り、持ち主の気高さを顕示しているかのようだった。尻肉も乳房に負けず豊満で、触れるまでもなく柔らかさと弾力を兼ね備えた蠱惑的な質感が伺える。太ももむっちりと肉感的で、細くくびれた柳腰から急激に太さを増すヒップラインと、そこから続く脚線美は、息を呑むほどに蠱惑的

だった。

例え聖人君子であっても、欲情せずにはいられまい。

これ以上ないほど単純で、それがゆえに絶対的な女性としての魅力――豊満極まる媚肉塊。

欲望の塊である淫魔が、それを前に、肉欲を抑えるなどできるはずがなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ……っく。ん……ふ、んん……！」

ぐにゅぐにゅ、じゅるじゅる……。

おぞましい肉音を立てながら、激しく蠕動を続ける触手の群れ。

女が囚われているのは、見渡す限りに肉と粘液が広がる、あまりにおぞましい肉部屋だった。

赤らんだ色彩は鬱血した内臓じみて、染み出す粘液は精液そのものの白濁色。ビクン、ビクンと不定期に痙攣するその様は、絶頂しかけの性器を思わせる卑猥さだ。その構成要素である無数の触手はすべてが生きており、囚えた獲物の肉体を味わい尽くさんと、四六時中休む間もなく蠢き続けている。

「くっ……ふ、あ……あっ！　くぅ……ん、んんん～～～ッ！」

うぞうぞ、ぐじゅぐじゅ……じゅぶぶぶっ！

無数の肉蛇に肉肌を擦られ、乳房を揉まれ尻肉を嬲られる。男根じみた触手に陰唇を抉られ、匂い立つ濃厚な媚薬粘液を体中に塗りたくられる――常人なら廃人化確定の、人間

では許容しきれないほどの魔の快感を、しかし、彼女は必死で耐え続けていた。
（……負けません。わたしは……こんなものに、決して負けてはならないのです……！）
キッ！　と眦を引き締め、意気を込める。
明らかな発情状態にありながらも、なおも抵抗心を失わない――その表情は、艶めきながらもなお凛々しい。
女の名は、円城咲耶。
若くして天賦の才を開花させ、最強の誉れも高き退魔師。
他者には優しく、しかして自らには容赦なし。
持って生まれた才能に胡座をかくことを決してせず、常に自らの力を磨き続け、最前線で淫魔との戦いに身を置き続ける。
その法力だけでなく、高潔な人格も、また邪悪を許さない使命感の強さにおいても、正しく全退魔師の頂点に輝ける極星の如き才女。
事実、この若さにして浄滅してきた淫魔の数は数え切れないほどで、数多の退魔師に慕われ、またそれ以上の人々から感謝と尊敬を集めている。
淫魔の跳梁に脅かされるこの暗黒の時代において、まばゆく輝く希望の光――それが円城咲耶だ。
だが――
「くぅ、ふううぅ……っく！　ふ、あ、あああ……！」

全人類の希望は、即ち全淫魔の怨敵に他ならない。
どれほどの才気と法力を持ち合わせていても、咲耶は人の子だ。神仏ではないのだ。
天地を埋め尽くすほどの淫魔群との連戦に、卑劣極まる奸計。悪逆の群れに屈することなく、最後まで雄々しく戦い続けた咲耶だったが、やはり限界は訪れた。
共闘していた若手の退魔師を人質に取られ、最強の退魔師は、ついに淫魔に膝を折ることとなったのだ。
そして淫魔界に囚われた咲耶は、それからずっと――
もう数ヶ月もの間、延々と魔界調教を受け続けているのだ。
「くうっぅ……んんっ！　あっ……ふ、うう……んんんっ！」
ドビュッ！　ドビュッドビュッドビュドビュッ！
喜悦に震える肉棒触手が、大量の精液を前後の穴にぶちまけた。
量も濃さも熱さも、人間のそれとは桁外れ――女を狂わせるためだけに特化した淫魔の媚薬精液を溢れるほどに注がれながら、しかし、咲耶は絶頂どころか、嬌声を上げることさえしなかった。
「ふうぅっ……はぁ、はぁ、はぁ……っふぅ。ふ……ん……んん……」
（また……射精されましたか。大量に射精しながら、まだ動いていますね。なんと卑猥で忌々しい……いやらしい、淫魔なのでしょう……）
淫魔の虜囚に身を堕してから、もう数ヶ月。

朝も昼もなく、休む間もなく犯され続ける毎日。
もうどれだけ屈辱の時間を過ごしたのか、もはや、正確な日時はわからなかった
この肉部屋に監禁され、四肢を触手に戒められてひたすらに犯され続けてからも、すでに一週間は経過しているだろう。
だがそれでも、なお。
「……っ。ふぅ、はぁ、ふぅ……ん。んん……！」
（大丈夫……大丈夫です。この程度の責めなど、どれほど続けられようと……わたしは、決して屈しません……！）
咲耶は、敗北していなかった。
法力を使い果たし、無力な虜囚に堕ちてなお、最強の退魔師は、まるで屈していない。
（耐える……魔界の快楽に屈せず、耐え続ける。今できるのはそれだけです。ならば、そうするだけの事です。今までのように、何をされても……負けません！）
射精を終えたばかりの触手をキッ！　と睨みつけ、抵抗の意思を示す。その眼力だけで、触手淫魔は怯み、すごすごと引っ込んでいった。
「ふぅ、ふぅ、ふぅ～～～……。すぅ……ん、んん……！」
呼吸法で息を整え、精神を落ち着かせる。肉体は快楽に漬け込まれながらも、退魔師の魂の輝きは、むしろいや増してさえいるほどだった。
「いやはや、実に素晴らしい。この肉部屋に十日もの間閉じ込められながら、一度たりと

も達しないとは……最強の退魔師の名は、伊達ではありませんね」

「……貴方ですか」

それは、いつの間にか咲耶の眼前に立っていた。

外見は人間に似ている。だが、欲望に濁りきった眼光と、全身に纏う邪気の濃さが、それが高位の淫魔であることを物語っていた。

「お久しぶりです、咲耶さん。ご機嫌はいかがでしょうか？」

「最悪ですね。この場所も、貴方の姿を目にしてしまったことも、不愉快でしかありません」

つとめて冷たく、咲耶は吐き捨てた。

（魔界調教師……不愉快な淫魔です……！）

真名はわからない。

だが退魔師の間でも、魔界調教師の存在は噂となっていた。

曰く、多くの淫魔の背後でそれらを操る黒幕。

曰く、他の淫魔とは格別の魔力を持ちながら、戦いに用いることはない謎の存在。

曰く、殺さずに囚えた女退魔師を魔界にて調教し、異形の快楽と魔の肉悦に溺れさせる専門家。

どんな気高い戦士であっても、その手管にかかれば一匹の牝同然。一度囚われてしまえば身も心も蕩かされ、二度と元の人格へ戻ることはない。

すべての女退魔師の天敵。最悪の外道――その毒牙にかかったものは数知れず、その全てが、もはや人間としての尊厳ある生活を過ごすことすら出来ていないという。

「しかし、また貴方とこうして素敵な時間を過ごす機会が巡ってこようとは。魔界調教師などという仕事を真面目に続けていた甲斐もあるというものですよ」

「わたしは、会いたくなどなかったですが。できれば、二度と」

「ふふ。その気丈な態度も、高潔な人柄も……あの時とまるで変わりない。やはり貴方は素晴らしい。わたしの調教を受けながらなお退魔師として戦い続けるというその意志の強さ、正義感。しかも今や、我ら淫魔に対する最大の脅威、最強の退魔師にまで成長した……素晴らしい、実に素晴らしいですよ、円城咲耶さん」

「っ……」

円城咲耶と魔界調教師。

二人が出会うのは、此度が初めてではない。

それは、咲耶がまだ年端も行かぬ幼年の砌。蕾のような少女でありながら、すでにその力は一流の退魔師をも上回るほどであったが――少女咲耶は、人生ではじめての敗北を喫した。

その相手が、この魔界調教師――そして咲耶はその時も、苛烈な調教を施された。性の悦びすら知らぬ幼い肉体におぞましい魔悦を教え込まれ、雌畜としての烙印を幾度も刻まれ汚し尽くされたのだ。

だが咲耶は、その淫獄からなんとか脱し、そして――それからも淫魔と戦い続け、研鑽を重ね、最強の退魔師として成熟した。

そんな二人が、今またこうして出会ってしまった。

狩る者と狩られる者。

犯す者と犯される者。

彼我の胸裏は、如何なるものか――

「っ……」

「ふふ……」

魔物の淀んだ瞳が、退魔師の澄んだ瞳を、汚すように睨めつける。

「それで？　また新たな責めを追加するつもりですか？」

内心、不安が、いや恐怖が鎌首をもたげている。

――あのときのように、また……――そんな気持ちが、抑えられない。

だがそれをおくびにも出さず、咲耶は冷静に言葉を紡いだ。

「無駄ですよ。名高き魔界調教師ともあろうものが、まだわからないのですか？　何をされても、わたしは決して堕ちる事はありません。あの時と同じように、です」

「はは。相変わらず手厳しい。淫魔の苗床とされてなお、その凛々しい態度。嬉しくて勃起してしまいそうですよ」

愉快そうに騙るが、声はまったく笑っていない。

その邪気に当てられてか、それとも何か手を加えたのか。
触手淫魔の動きがさらに激しくなったが、咲耶は「んっ」と静かな喘ぎを零すだけで、反応さえ見せない。
「ああ、そのように素晴らしい肉体へと育ちながら、未だに堕落と敗辱の幸福を知らないとは……哀れなことです。ですがわたしは、あのときにも約束しました。そんな貴方に、女としての至高の快楽を教えこんでみせる、と。今こそ、その約束を果たす時なのです」
「んっ……わ、わたしも言ったはずです。決して負けません。何をされても屈指はしませんん……と……んんっ！」
四肢を触手に拘束され、肉穴を穿られ嬲られながらも、咲耶はキッ！　と調教師をにらみつける。
例え法力が使えなくても、それだけで殺されてしまいそうなほどの、恐ろしいほどに鋭い視線だった。
「おお、その凛々しい睨み顔も素晴らしい！　いつまでもこうして談笑を続けたいのは山々ですが、残念。そろそろ、わたしも次の仕事がありますから……残念ですが、前戯はここまでとなります」
（前戯……ですって？　今までの調教が……すべて遊びだったとでも言うのですか？）
信じられない。だが、ただの虚言とも思えない。
あの時もそうだった。

この男は、まるで底がしれない――――！

「っ……！」

「さて」

そんな咲耶の不安を煽るように、魔界調教師はどことからともなく一匹の小さな淫魔を取り出すと、その尻尾をつまんで咲耶の眼前に見せつけた。

不気味な魔物だった。梨の果実のようなずんぐりとした形状で、目も鼻もなければ手足さえない。塊状の肉体の先端は十文字に口が開き、ぬちゃぬちゃと咀嚼を繰り返している。調教師に摘まれた尾部は忙しくなく振り回され、ビトン、ビトンとおぞましく前後運動を繰り返していた。

「なんですか、それは……？」

咲耶も、これまで見たことのない淫魔だった。

「これは乳嬲虫と言います。わたしの作り出したオリジナルの調教用生物です。あの頃には存在しなかった新作ですね」

咲耶の問いに、調教師は笑うこともせず、事務的に答えた。

「名前の通り、乳責めに特化した魔物です。生まれてから死ぬまでの時間を、ただ人間の乳を責め、嬲り、犯すことのみに費やします。それ以外のことは全く出来ません。戦闘力も虫ケラ並、淫魔としての格は最下級です」

（……確かに。ただの下級淫魔のようですが……）

確かに見た目は不気味だが、妖気も殆ど感じない。咲耶ほどの退魔師であれば、法力を振るうまでもなく、睨むだけでも調伏できそうなほどの、最下級淫魔だ。

「ですが、そんな下等な淫魔に、貴方はこれから堕とされるのです」

男は、変わらない調子で続けた

「乳蠅虫は最弱の魔物ですが、乳を責めることに関しては最強なのです。今の貴方は……いえ。貴方のその立派な乳房は、彼らの責めには決して耐えられません」

「……面白いことを言いますね」

極上の巨乳の前でビクンビクンと痙攣し、喜悦にのたうち回る淫虫のおぞましさに息を呑みながら、咲耶はつとめて冷たく吐き捨てた。

「６４。そして４８。これが何の数字か、貴方は覚えていますか？」

「はて？　すみません、浅学な物で。できれは教えていただけますと助かります」

「あの時、貴方に施された……そしてここに囚われてから、貴方がわたしに施した魔界調教の数です。そのたび、貴方は先程のように勝利を確信していたようですが、結果はどうですか？」

「ううむ、これは手厳しい」

「今回も同じです。何度でも言いますが、何をしても無駄です」

ただの強がりではない。

過去から現在に至るまで、実際、咲耶はこれまで、すべての魔界調教に耐えきってきた

のだ。
触手に全身を愛撫され、媚薬粘液に漬け込まれ、肉を揉まれ尻をこねられ陰核をシゴかれた。口も肛門も子宮も、そのすべてに種々様々な淫魔の肉棒と触手を挿入され、溢れんばかりの子種汁を穴という穴に注がれた。
そのおぞましい快楽の凄まじさたるや、常人どころか並の退魔師なら思考さえ保てなくなるほどだったが……咲耶は高潔な精神だけで、その全てに耐えきってきたのだ。
（今のわたしに、抵抗するための力は残されていません。このように下等な淫魔を除く力さえありません。悔しいですが、それが現状です）
淫気の満ちた肉空間では体力も理性も削り続けられ、法力の回復も期待できない。もはや今の咲耶は、淫魔に調教されるがままの肉贄だ。
だが、それであっても、なお咲耶は最強の退魔師なのだ。
淫魔に抗するための強さとは、力だけでない。咲耶の高潔な精神力は、未だまるで衰えていなかった。
（……負けません。このような下級な淫魔の責めなどに、わたしは決して屈しません！）
キッ！　と眦を引き締め、意気を込める咲耶。眼前に迫る乳蠅虫のおぞましさから目を背けることなく、むしろ睨みつけるほどの胆力だ。
「ふふ。素晴らしいですね。その気概がどこまで持つか……楽しみですよ」
取り出された乳蠅虫は、二匹。それぞれが大きく口を開き、左右の乳房に狙いを定める。

くぱぁ、と十文字状に開口された先端部から、内臓じみた舌がヌルヌルと伸びだした。

「っ……！」

そのおぞましさに、咲耶は思わず息を呑んだ。

粘液まみれの舌はぬらぬらと照り光り、獲物を求めて卑猥に蠢き続けている。開いた口腔から覗くのは、赤く爛れた粘膜と、くちゃくちゃと蠕動を繰り返す肉襞の集合体。その卑猥な造形は、まるで爛熟した女性器を思わせた。

（な、なんと淫猥なのでしょう。あのようなものを、こ、これから……）

想像しただけで、乳首が固くシコってしまう。

これまでの責めには、確かに耐えてきた。

どれほど犯されても、どれほど絶頂させられても、心まで屈しはしなかった。

だが、それでも――すべてを拒絶できたわけではない。

ここに囚われての調教で、たっぷりと味わわされた。

淫魔による凌辱、人外の魔悦、その快感の凄まじさ。

確かに、これまでは耐えてきた。

だが果たして、これからも、同じように耐えられるのか――

許容量を超えてしまった、その瞬間。

空気を入れすぎた風船のように、すべてが爆ぜてしまうのではないか。

快楽で、壊れてしまうのではないか――

そんな不安が、なかったわけではないのだ。
（！　い、いけません……ここで弱気になっては！）
頭をよぎる敗辱の未来を、咲耶は軽く髪を揺すって否定した。
（弱気は敗北を招きます。気を強く持つのです。そうすれば、今回も、きっと……）
「ふっ……く、んん……ッ！」
にゅるんっ、と伸ばされた舌先が、乳首に触れるか触れないかの位置で空を切った。
パクパクと開閉を続ける肉口は乳房に食いつく事なく、けれどひどくいやらしく咀嚼を繰り返す。
「あ、あ、あああ……」
直接の刺激はない。しかし、眼前で繰り返される動作が、これから自分の乳房にされるのだという確信。
不安が、恐怖が、そして期待感が――どうしようもなく、煽り立てられてしまう。
（っ！　い、いけません……集中するのです、咲耶！）
最初は、その動向を観察し、備えるつもりだった。
だが、いつしか咲耶は、目の前で卑猥に蠢く肉塊たちから、目が離せなくなっていた。
「今から貴方はこの下等な淫魔に泣かされるのです。その姿を、じっくりと眼に焼き付けておいてくださいね」
両手につまんだ淫虫を、ゆらゆらと揺さぶって見せる魔界調教師。そのたび触れるか触

れないかの位置を肉舌が掠め、おぞましい存在感と体温とが伝わってくる。
「くっ……ふ！　く、うう……あっ！」
ビチャっ、と飛び散った粘液の飛沫が、乳首に降りかかる。緊張しきって充血していた乳豆は、僅かな刺激にも感じてしまい、思わず甘い喘ぎが溢れてしまう。
「ほら、ほら。どうです？　こうして見るとなかなか可愛いでしょう？　彼らも貴方の素敵なおっぱいに興奮しきっていますよ。淫魔をも欲情させるとは、罪な女性ですね咲耶さんは」
「っ……だ、黙りなさい。そのような言葉での揺さぶりなど……わたしには無意味ですよ」
「そうですか？　先程から貴方の乳首も反応しているように見えますがね。まぁ、乳蠅虫の淫気と催淫作用は強力ですから、貴方のようにはしたない巨乳には効果覿面ですがね」
「っ……！」
（いやらしい男……！　こうして、わたしを焦らしているつもりですか？　不愉快です……！）
凌辱に耐え抜く覚悟は決めている。
だが、実際に攻撃が繰り出されなければそれも無意味だ。
その間にも、飛沫く粘液は乳房を濡らし、溢れる淫気が乳肉を少しずつ発情させていく。
（確かに……下級淫魔にしては強力な淫気です。確か……乳房を責めるためだけに特化した調教用の人造淫魔、という事でしたが……）

くぱぁ、くぱぁっと口を開閉させる肉塊を見つめながら、考えを巡らせる。
戦闘力の一切を排除し、そのすべての機能を乳房への責めのみに特化させた専用の調教魔生物。確かに感じる力は下級そのものだが、淫気の濃さは猛烈だった。
近くにいるだけでもこれほど発情を誘われてしまうほどの淫魔に、力を失った今、性感帯である乳房を直接責められたら、一体どれほどの――
「はぁ、はぁ、はぁ……っく！　くぅ……ん……！」
何もされていないがゆえに、想像力だけが勝手に働いてしまう。
淫魔との戦闘経験豊富な熟練の退魔師だからこその、そして自らにに厳しく、常に最悪の状況を想定する天才だからこその陥穽。
こうして眼前に脅威を見せつけられたまま、何もされないというのは――常に極度の緊張を強いられ、また淫惨な想像も止められないのだ。
（くっ……ま、まだですか？　何度も何度も、こうして揺らすだけなんて……。一体、いつ仕掛けてくるのですか……？）
気が抜けない。
だから、目を離してはいけない。
それだけの事……だが……
「はぁ、はぁ、はぁ……ごく。ん……んん……！」
くちゃくちゃ、にゅるにゅる。

触れるか触れないかの位置で蠢く、卑猥すぎる肉の塊。
見ているだけで胸が高鳴り、乳房が熱く疼く。乳首が固くシコり、痛いほどに切なさを増す――
「はぁ、はぁ、はぁ……っく、ん……ふ、んん……！」
（あ、あれに噛みつかれたら……ああ。飛沫だけでもこれほどの効果があるのに、媚薬まみれの肉袋に乳房を包まれたら……そして、咀嚼されたら……）
想像しただけで、乳房が蕩けそうになってしまう。その責めに備えて気を張り続けるのも、もう限界だ。
（くっ……来るなら、来なさい！　なぜ……このような……！）
「おやおや、物欲しそうな目をして。そんなにこの乳蠅虫が欲しいのですか？」
「！　バカを言わないでください。そ、そのようなはず……ありません」
ハッ、と周知に顔を赤らめ、咄嗟に拒絶する。だがその声には、隠せない狼狽があった。
（わ、わたしは……今、何を考えて……！？）
油断と恥辱に、顔が熱くなるのがわかった。
そして、そのスキを見逃す魔界調教師ではなかった。
「ふふ。良いのですか？　乳房に集中しなくても」
「え……あ、ああっ！？」
グィッ！　一瞬の虚を突き、魔界調教師は手を突き出した。

そうなれば、当然――

「あ、あ……あっあああああ――――――!?」

ぐちゃっ、にちゃ、ぐちゃあああああッ！

左右同時に、二匹の乳蠅虫が乳房に密着させられた。

それも、これまで寸止めされていたものが、思いっきり力を込めて――両乳房が押し潰されんばかりに、グッと押し付けられる。

「う、あ……あっ！　そんな、い、いきなり……ふあああああぁ!?」

（し、しまった！　今は……ダ、ダメ……ッ！）

精神を集中し直す、そんな余裕は与えられなかった。

「う、あ……あ、。あああああああ――――――!」

にちゃっ……ぐちゅううううっ！

大きく展開された肉口が、豊満な乳房を呑み込んだ。勃起した乳首はおろか、ぷっくりと充血した乳輪も、熱く火照る乳肉も、そのすべてが一息に飲み干される。

そして――

ぐちゃっ、にちゃっくちゃっぐちゃぐちゃぐちゃあああぁぁ！

「あ、はあぁ、あっはあああぁぁ!?　む、胸……うあああぁ、た、食べられ……っくはあああぁぁっ！」

これまで注視していた咀嚼運動の、何倍もの激しさで。

小柄な体躯からは想像し得ない、凄まじいパワーとスピードで。
想像していたよりも、遥かに激しく、そして淫らな動きで。
獲物に食らいついた淫虫は、猛烈な咀嚼運動を繰り返す。
（くっ、こ、こんな！？　これほどの激しく動き……想像以上ですっ！　わたしの乳房……捏ねられて、吸われて、食べられて……っ！）
気を張り詰めていたはずなのに、完全に虚を突かれての奇襲。
しかも、十全に予測していたはずの見積もりを、遥かに上回る貪欲さ。
両乳房への猛烈な奇襲攻撃に、咲耶は完全に圧倒されてしまっていた。
「おや、ずいぶんと可愛らしい声が出ましたね。感じてくださっているようで、嬉しいですよ」
「なっ……ば、バカな事を言わないでください！　こ、このようなものっ……ふ、く、うぅうっ！　な、何でも……何でもありませんッ！」
殷懃無礼な言葉に、必死で言い返す咲耶。だがその間にも猛烈な咀嚼運動は続き、絶え間なく乳房全体を責め嬲られる。その凄まじい快感に声が上擦り、喘ぎが混じってしまうのを止められなかった。
（くっ、い、いけません！　冷静になるのです……気を静めて……集中……集中しなければ……！）
持ち直そうとするも、一旦始まった乳嬲虫の責めは、当然それを許さなかった。

激しく、かつ執拗に。
乳肉を揉み潰し、乳首を吸い、乳峰を締め上げる。
「うっ、ふくあ、ああっ！　も、揉むの強い……くはあぁぁ、ち、乳首……吸われて……っ！」
いかにも原始的な外見に反し、乳嬲虫の責めは複雑で、そして技巧的だった。
万力のような力で乳房全体をぎゅうぎゅうと圧搾し、かと思えば猛烈な勢いで乳首を吸い上げられる。ぐちゃぐちゃと蠕動する肉襞はぴっちりとカップに吸い付き、完全な密着距離で振動して乳房全体をマッサージされた。
「くっふ、ふあ、あ、ああっ！　ひぅ……っく、ううぅっ！」
（な、なんですか……なんですかこの動きは！？　こ、このような動き……淫魔とは言え、生き物がして良い卑猥さではありません……っ！）
これまでの調教でも、何度も乳房は責められてきた。
乳責めだけで絶頂させられたことも、悔しいが一度や二度ではない。
だが、これほどまでに複雑な快楽を、同時多発的に叩き込まれたのは、はじめてだった。
「くっ、ふ、あっ、あっ！　ふぅ、く、ううぅぅ……！」
おっぱいを包み込む肉襞の、ひどく卑猥な生暖かさ。
蕩けそうに柔らかい、肉襞の触感。どこまでも乳肉が沈み込む、泥濘のような受容感。
蕩けそうな柔らかさの中に点在する、コリコリした肉疣の絶妙なアクセント。

その全てが相まって、まるで熟れた女性器のごとき卑猥さだ。しかもそれはひどく飢え、貪欲な肉穴なのだ。

「うああぁ、あ、ああっ！　む、胸っ……くうぅっしつこすぎます、激しすぎます、いやらしすぎます……うぅうっ！」

まったく止まることなく、微細な振動とダイナミックな蠕動を織り交ぜながら、休む間もなく乳全体を犯される。

さらにはたっぷりと分泌される粘液は強烈な媚薬作用を持ち、乳肉の感度は、秒刻みで高められ続けているのだ。

（い、いけません……これは……これは……あぁぁっ！　む、胸が……感じすぎますっ、これ、効きすぎます……うぅうっ！）

ぶるんっ！　とおっぱいを揺すり、未曾有の乳悦に感じ入る巨乳退魔師。意識を集中しようとした瞬間には別の責めにスイッチされ、まったく備えることを許してもらえない――

「はあぁ、あ、あ、ああっ！　ま、また乳首吸われっ……ああっシゴかれていますっ、おっぱい、根本から全部っ……ふあぁぁっ揉まれる、食べられて……うあぁ、媚薬……また、こんなに濃厚な……あぁぁっ！」

もはや、声を抑えるどころではなかった。

快楽に呑まれないようにするのが精一杯で、意識を集中することさえ出来ない。

「くうぅ、だ、だめです……！　こ、これ以上は……っくうぅ、あああああっ！」

責められ続ける巨乳をぶるんぶるんと振りたくり、あさまし声をあげ悶絶する。メートル超えの巨乳が上下左右にダイナミックに揺れまくるも、がっぷりと食らいついた乳鰯虫はまったく引き剥がせない。むしろいっそう強く吸い付かれ、快楽が激化するのみだった。

「どうですか？　気持ちいいでしょう？　いえ、その反応を見れば、尋ねるまでもありませんでしたね」

「なっ、だ、黙りなさい！　そんな……こんなもの、き、気持ちよくなど……ひあぁぁ、そこ、そこはあぁぁっ！？」

魔界調教師の言葉を否定しようとするも、惨めにも肉体の反応はそれを肯定してしまっていた。新たに追加された責めと快感に、思わず怯えた声を零してしまう。

「うあ、ダ、ダメですっ！　そ、そこ……乳首……いぃいっ！？」

乳房全体を咀嚼されながら、内部で伸ばされた舌に乳首を絡め取られ、シコシコとシゴかれて虐め抜かれた。さらには細い先端で乳頭の窪みをクリクリと穿られ、耐え難い切なさに打ちのめされる。。

「ひあ、し、舌ッ……んおおぉぉっ激しいっ、ち、乳首……乳首はダメですっ、乳首敏感すぎるのに……んはあぁぁ、はひいぃいぃっ！」

乳房の中でも特に鋭敏な性感帯への苛烈な責めに、たまらず泣きを入れてしまう最強退魔師。

乳頭を穿られながら媚薬粘液を塗り込まれ、疼きまくる乳首を幾重ににも締め上げられてシゴかれまくり、たまらない乳悦に追い詰められる。。

「うあ、ダ、ダメ……これは、これは……ああっ！　くうぅうっやめなさい、乳首は……ふあ、あ、あああっ！」

ビクンッ！　と背筋を仰け反らせ、長髪を振り乱して悶え狂う。もはや声を抑えるどころか、身体の痙攣さえ止められない惨態だ。

（くっ、こ、こんな……ああっ！　こんな下級淫魔ごときの責めに……成す術もないなんて……！）

咲耶は、決して自信過剰な女ではない。むしろ自身への戒めは厳しく、過小評価気味といってもいいほどだ。

だがそれでも、彼我の実力差を見抜く眼力に、決して間違いはない。

相手はろくな戦闘力もない、最下級の淫魔。最強の退魔師と謳われた自分が、こんな下等生物に、手も足も出せないなんて……

（く、屈辱です……っ！　どうして、こ、こんな下級妖魔などに、逆らえないのですか……あぁぁっ！）

「不思議ですか？　これまで数多の淫魔を、いや天魔鬼神の類さえ浄滅してきた最強の退魔師である貴方が、このような雑魚になぜ抵抗できないのか、不思議でならないでしょう？」

「くうぅっ、ふ、く、ううぅっ！　はあぁぁ……あ、んふあぁぁ！」

もう、ろくに返事も出来なかった。
噛み殺せずに漏れてしまう快楽の喘ぎは、殆ど悲鳴に等しかった。
「教えてあげましょう。それは貴方が、この乳蠅虫にとって、もっとも与し易い……言わば雑魚にとってさえ餌にすぎない、最底辺の餌食だからです」
そんな咲耶の反応を冷ややかに見つめながら、つとめて事務的に、魔界調教師は言葉を続けた。
「先程も説明しましたが、この乳蠅虫は、乳房を責めるためだけに存在する、完全特化の調教用淫魔です。戦闘力も繁殖力も何もありませんが、その分、乳房に快楽を与える能力だけに関して言えば、あらゆる淫魔の中でも最強なのです」
「くっ、くうぅ……あ、あっ！　ふうぅ、あ、ああ……！」
それは、咲耶が一番よく理解していた。
淫魔に囚われて以降数ヶ月、魅力的すぎる咲耶の豊満乳は、淫魔たちにとって垂涎の的だった。
様々な種類の淫魔に、日々代わる代わる、あるいは執拗に何日もじっくりと、ひたすらに蠅られ続けてきた。
おっぱいでイカされずに済んだ日など、数えるほどしかないだろう。
だがそれでも、咲耶はその快楽に呑まれることはなかった。
それも事実だ……が……

（こ、この淫魔の責め……あ、ああっ！　き、効きすぎます……おかしいです！　どうして、こ、これほどまでに……ああ！　胸が心地よいのですか……耐え難いのですか……あぁっ！）

この乳悦は、あまりにも異常だった。

「答えは簡単です。その乳嬲虫は、およそ十年もの歳月をかけてわたしが手塩にかけた特別製……咲耶さん。貴方を逃したあの日から、わたしはずっと、貴方を……いや貴方の乳房を屈服させるためだけに、この淫魔を作っていたのですよ」

「な……なっ！？　そ、そんな……！？」

「しかし、それでもなお、再会した貴方の成長はわたしの想像を超えていました。その法力も、そして肉体もね。なので修正と再調整が必要でした。この数カ月間の調教は、そのためのデータ収拾が目的だったのです」

「う、あ、ああっ。そ、そんな……ふあ、あ、あああっ！」

魔物の執念と欲望に、ゾクリ、と背筋が粟立った。

この男が自分を開放してからの長い年月、そしてこの数ヶ月の責めは、すべてこの淫魔を生み出すための前段階に過ぎなかったのだ。

気が遠くなるほどの時間をかけて、咲耶の弱点をすべて暴き出し、それをもっとも効率よく責めるために開発された、いわば咲耶の天敵。

いや――咲耶の乳房を屈服させるためだけに存在する、最強最悪の天敵。

それが、この乳蠅虫たちなのだ。

「苦労しましたよ。実際、今回の調教で堕とせると踏んでいたのですが、まさかここまですべての責めに軽々と耐えきるとは。再調整に数ヶ月もかかってしまいました。正直脱帽しましたよ。流石は最強の退魔師、円城咲耶です」

言葉とは裏腹、そこには僅かにも咲耶への畏怖はない。

そこにあるのは、もはや実験を終えたモルモットへ対する、冷徹だけだった。

「ですが、それだけの成果はあったでしょう？　この乳蠅虫のもたらす圧倒的な快感……咲耶さんにとって、至上最高のものになっているはずです。そうですよね？」

「う、あ、っく……そ、そんな……ふあぁぁ、あ、あああぁ～～～！」

否定できない――その通りだ。

この下級淫魔の責めは、その尽くが――

（き、気持ちいい……気持ち良すぎます！　こんな……今まで味わったこともない……至上の快感……です……！）

「例えばその媚薬。魔界中の生物の様々な分泌物をかけ合わせ、貴方の肉体にもっとも適合する成分に調合しました。例えばサイズや質感、体温なども、貴方の乳房にもっとフィットするように調整してあります。まぁその反応を見れば、これは説明する必要もありませんかね？」

「く、ち、違います！　こ、このようなもの気持ちよくなど……あ、あ、ああっ！　ふう

うぅ……クはあぁ……あああああああっ！」

種明かしをされれば、単純な話だ。

すべて、最初から計算されていたのだ。

あまりにも強烈すぎる媚薬。飛沫だけでも乳首が勃起してしまい、淫らな期待感が止められなかった。こうして直接塗り込められれば、乳房全体が蕩けそうなほどに異常すぎる発情状態だ。

メートル超えの咲耶の乳房に、ちょうどぴっちりと吸い付く適度なサイズ。ややきつい締付けなのが、ヌルヌルとぬめった肉膜のフィット感と相まって、逆に最高に気持ちいい。

人肌のぬくもりを感じる体温も、肉襞の密集具合やイボイボのアクセントも、乳房を引っ張る重さも吸い付く強さも、豊満な質量をしっかりと噛み潰し揉みつぶす咬合力も、そのすべてが――

（き、気持ちいい……気持ち良すぎますっ！　こんな……わたしを調教するためだけに……わたしの乳房を堕とすためだけに誂えられた……そのような生物が、い、いていいはずがありません……！）

あまりに淫猥な生物の出自に、背徳的な絶望がよぎる。

ただ自分を犯すためだけに、理さえ捻じ曲げて生み出された調教用生物。それが自分に向ける執念と貪欲さは、あまりにも強烈で――

「くうぅ、ふあ、あ、あああっ！　む、胸が……ふうぅ、あっくあああぁぁ～～～！」

じゅるる、ぞるるるるっ！

女性器さながらに淫猥な肉ヒダが激しく蠕動し、乳房全体を飲み込まんばかりに吸い上げた。ぴっちりとフィットした肉膜におっぱい全体をマッサージされ、微細なバイブレーションで震わされて愛撫される。コリコリと絶妙な硬さの肉疣で蕩けた乳房を刺激されるのが、絶妙なアクセントとなって乳悦に慣れる事さえ許されない。

「うあぁぁ、お、おっぱい……溶ける、蕩ける……うぅっ！　こ、こんな……揉まれて、吸われて……んおおおおっ奮えていますっ、イボイボもいっぱいで……ふあああぁ、これ、ダメです……うぅぅ～～～！」

「そうでしょう。すべて貴方が、いえ貴方の卑猥なおっぱいが大好きなやり方ですからね。なにせ幼い頃から、貴方はこれが好きでしたからね。力加減も絶妙でしょう、気持ちよくてたまらないでしょう？」

「くうぅ、そ、そんな……ああっ卑怯ですっ、こ、こんな……あああっそこだめぇ、き、気持ちいいところばかり……こんな気持ち良すぎるやり方で、こんな、気持ちよすぎる塩梅で……えぇぇぇぇ～～～～！」

屈辱的な言葉が、まるで否定できない。

豊満極まる乳房の中でも、特に弱い場所ばかりを狙っての密着愛撫。

グイグイと乱暴に乳房を潰されるのも良い。

優しく乳肌を撫でられるのも気持ちいい。

ピンポイントに乳首を吸われるのも、乳輪をくすぐるように刺激されるのも、乳峰から先端までをシゴキあげられるのもたまらない――

数ヶ月をかけて暴き出された咲耶の弱点、いや性癖のすべてを満足させるべく、咲耶専用の乳嬲虫は、その責を加速させていく。

「うあ、ち、乳首……また……あぁぁっ！　ひあああぁっクリクリしないでぇ、そ、そこ弱いんです、乳首の先っちょクリクリ……んおおおっシゴくのもダメです、乳首シコシコしながらクリクリ……ひあぁぁっ卑怯です、それズルすぎます……うぅぅ～～～～！」

ただでさえ敏感な乳首への責めも、また計算し尽くされたものだった。

おぞましい肉舌の動きは極めて繊細で、感じやすすぎる乳頭の窪みから、乳腺にまで響くほどの快感を刳り込んでくる。乳首を根本から先端にかけてシコシコとシゴキあげられ、たまりきった快感を押し込むように乳頭を穿り込まれれば、もうたまらなかった。

ついに吐露してしまったように、最大の弱点を一番気持ちいいやり方で可愛がられ、もう、咲耶も限界だった。

（うああ、ダ。ダメ……これはダメ……これだけはダメですっ！　お、おっぱい全部食べられながら、乳首シコシコ、コリコリ……わ、わたしの弱いところ知られています……全部、下級淫魔にバレちゃってます……うぅぅっ！）

恥ずかしい弱みと性癖を、こんな雑魚に全て掌握されてしまってる。

その屈辱と敗北感とが、被虐の快感をさらにマゾヒスティックに加速する。

その間にも専用に調教された特攻媚薬が乳房にも乳首にもたっぷりと塗り込まれ、天井知らずに感度を増した弱点を、変わらぬ執拗さで延々と可愛がられ続ける――

（くあぁぁ、ダ、ダメ……ぇぇっ！　こ、これ以上は……もう、もう……！）

耐えられない――

敗北の予感に子宮を戦慄かせながらも、屈辱の瞬間を必死で先延ばそうと、咲耶は必死で上半身を暴れさせた。

「あうぅっ、や、やめてください……もう、もうっ！　は、離れなさい……わたしのおっぱいから、は、離れて……くうぅ、はあああぁっ！」

艶やかな長髪を振り乱し、左右の巨乳をぶるんぶるんと揺すりたくる。だがどれだけ暴れても、両乳房にガッシリと食らいついた乳鰓虫は、まるで外れることはなかった。

（あうぅぅ、ダ。ダメです！　全然取れません……両方のおっぱいに、すごい力で噛みついてきます……！）

どれだけ暴れても、まるで無駄な抵抗だった。むしろ、みっちりと密着した粘膜に乳房が引っ張られ、その摩擦で余計に惨めな快感を覚え込まされてしまうだけ。その間にもぎゅうぎゅうとおっぱいを揉み込まれ、媚薬粘液を刷り込まれながら乳首を可愛がられ、両乳房に快楽を溜め込まれ続ける。

「無駄な抵抗……とは貴方の言葉でしたか。今度はお返ししますよ咲耶さん。どんなに暴れても、乳鰓虫は決してあなたの乳房を離しません」

「く、くうぅぅ……あ、あぁぁ！　ひあぁぁっまた激しく……あぁっしつこすぎます、そ、それはダメだって、ち、乳首クリクリはダメとさっきも言ったのに……ふあ、あっあああ～～～～！」

「彼らは貴方のおっぱいを愛しています。ただそれだけに生まれた存在なのです。その生涯をかけた愛を否定しようなど、あまりに無情ではないですか？」

「そ、そんなっ……知りません、そんなの知りませんっ！　わたしは、こ、こんな下級な淫魔の愛などいりません……うあぁぁっダメぇぇっ、シコシコクリクリ、おっぱいぎゅうぎゅうしながら乳首いじめるの気持ち良すぎますぅぅ～～～～！」

むにゅうぅぅっ、ぎゅむうぅぅぅっ！

つれない言葉へのお仕置きとでも言うように、乳鰯虫の責めが苛烈さを増した。

今まで以上の力で両乳房を噛み潰され、形が歪むほどの強さで根本から圧搾される。激しく蠢く肉舌に乳首をシゴかれまくり、大量の粘液を刷り込まれながらクリクリと穿られる。根本から先端まで媚薬粘液でヌルヌルの乳房は、高温多湿な淫魔の口腔内でムレまくり、怖いぐらいに感度を増してしまっていた。

「うあぁぁ、わ、わたしのおっぱい……こ、こんなにいやらしく……うあああっダメぇぇ、おっぱい弱すぎるっ、か、感じすぎます……ううぅぅっ！」

もはや根本から先端まで、そのすべてが淫らな性感帯。暴き出されてしまったたすべての性感帯を、気持ち良すぎるやり方で嬲られ続け、ついに溜め込み続けた快感が飽和する

――

（ああ、は、爆ぜる……イクッ！　ダメです、も、もう……限界……です……！）

耐えなければ。

でも、耐えられない。

空気を入れすぎた風船が破れてしまうように、もう、もう――！

「ク、あ、ああ……あ、あああああっ！」

決して否定できない敗辱の瞬間は、ついに訪れた。

ガブッ！　ズブ、ジュルルルルッ！

「ひっ！？　お、おっぱい吸うの強っ……乳首……すごいいぃいっ！」

ひときわ強く噛みつかれ、ガッシリと位置を固定された。同時に、媚薬まみれの肉舌が、乳腺に挿入されるほどの勢いで突きこまれる。

その凄まじい衝撃に、咲耶は、ついに――

「あ、ああッ！　も、もうダメです……耐えられない……耐えられません……んんっ！」

「わかっていますね？　絶頂した際にはしっかりイクと敗北宣言するのですよ。幼い貴方に調教してあげたとおりにね」

「あ、ああっ……いや、イヤです！　そ、そんな恥ずかしい敗北宣言したくありません……ひあああ、あ、あああああっ――――！」

ズブ、ズブブブブッ！　左右の乳首を、同時に深く穿り抜かれる。その激しさと気持

ちよさは、もはや乳房に対するセックスそのものだ。

「うあ、だ、ダメ……も、もう……イ、イクッ……うううぅうぅぅ！」

女の園を貫かれるよりも、なお深く甘いその快感。

両乳首で同時に極めさせられた乳絶頂に、咲耶は――

「イ、イクッ！　乳首でイキますっ……こ、こんな下級淫魔ごときにおっぱいだけでイカされてしまいます、咲耶、おっぱい犯されてイキます……うぅぅぅ～～～～！」

命令どおりに恥ずかしすぎる敗北宣言を極めながら、乳絶頂の快感にイキ狂う巨乳退魔師。ビクンッ！　と背筋が大きく仰け反らされ、追ってブルルンッ！　と両の巨乳が揺れ踊った。

「ふむ、よろしい。イク時には子供らしく自分の名前を口にするように躾けましたが、ふふ。数多の淫魔に恐れられる最強の退魔師にまで成長した貴方が、子供のように自らの名を叫びながら快楽に屈するさまは、実に可愛らしいものです」

「クううぅ、そ、そんな……はあああぁっ！　ま、またイクッ……さ、咲耶、またイキます……クほおおぉ、おっほおおぉぉおおおおぉっぉおお～～～～！」

あまりにも屈辱的な調教の記憶を思い起こされ、しかもその忌まわしい疵痕は、どれだけ否定しても魂の奥底に刻み込まれたまま。それをどうしようもなく思い知らされ、たまらない敗北感がエクスタシーをいっそう甘美に倒錯させる。

「クはあぁぁ……あ、あ、あぁっ！　いや、いやあぁ……ック、クはあぁぁ……あぁぁぁ

〜〜〜〜！」

上体だけでなく喉まで反らし、甘美すぎるエクスタシーに感じ入る敗辱の退魔師。これまで必死で耐えてきた反動で、一度認めてしまった絶頂は、あまりに深く激しかった。数分にも続くアクメの間、背筋をブリッジさせたまま、咲耶はビクビクと肢体を痙攣させ続けた

吐息を零すたびに大きく揺れる乳房は、絶頂してなお淫魔たちに貪られ続け、心地よすぎる絶頂感が途切れない。

「う、ああぁ……イ、イってる……おっぱい、ま、まだイってます……うぅっ！　ああ、や、やめてください……お願いです、咲耶のおっぱい、す、少し休ませ……ックほおおぉおお！」

一度敗北を認めてしまえば、もう、後はなし崩しだった。

弱みを隠しきれない淫乱な弱点を休む間もなく可愛がられ、一度目の絶頂が終わらない間にまたしてもイカされる。ブリッジしたままの身体がさらにビクッ！　と仰け反らされ、イキっぱなしの巨乳がぶるんぶるんと揺れていっそうの快楽で追い打ちされた。

「うあ、イ、イクッ……おっぱいまたイキますっ、まだイってるのに……一回目もイキ終わってないのに……いぃいっ！　こ、こんな……咲耶のおっぱい……ああぁ、よ、弱すぎます……イキやすすぎます……ううぅ！」

すっかりと弱点を暴き抜かれ、従順に躾けられてしまった二つの肉鞠。もはや抵抗の仕

方もわからず、咲耶は一度目の絶頂が終わるまで、さらに五回もの乳絶頂を極めさせられてしまうのだった。

「どうですか？　特別性の乳蠕虫による絶頂の味は？　気持ちよかったでしょう。この快楽に、身も心も委ねたくなってしまうでしょう？」

「クうぅぅ……はぁ、はぁ、はぁ……ツク！　ふ、あ……くうぅぅぅ……！」

連続絶頂で一瞬意識を失った後、なんとか理性を取り戻した咲耶。上体を起こし荒く息を吸うも、乳房への責めが終わったわけではない。

「気付いていますか咲耶さん？　貴方、もうイキそうな顔をしていますよ？　これまでわたしが堕としてきた退魔師と同じです。結局人間の女などというものは、快楽には逆らえないのです」

「はぁ、はぁ、はぁぁ……ツクうぅぅ！　く、うぅぅ～～～ッ！」

ろくに言葉も返せない、あまりに無様な敗北絶頂。

だが、自分だけでなく、気高い退魔師たちをも辱める魔界調教師の言葉が、咲耶の怒りに火を付けた。

「だ、黙り……なさい……！」

凄まじい快楽の中、咲耶は、それでも歯を食いしばり、言葉を振り絞った。

「ま、負けません……わたしは、わたしたちは！　このような快楽になど……決して、負けたりしません……！」

「ほう？」

じゅんじゅんと蕩けそうなほどに疼く乳房。またしても襲い来る絶頂並みを必死で堪えながら、咲耶は、途切れ途切れながらも言葉を紡いだ。

「こ、この程度の快楽……っく、はあぁっ！　ま、負けません……わたしは、た、耐えてみせます……っツク、ふうぅぅんんっ！」

快楽の涙に潤んだ瞳で、それでも強く睨みつける。

最悪の天敵に弱点を責め抜かれながらも、咲耶は、未だ最強の退魔師の気高さを失っていはなかった。

「素晴らしい！　それでこそ最強の退魔師、それでこそ円城咲耶！」

魔界調教師の声が、はじめて熱を持った。

狂気と欲望をにじませる、淫魔らしい、ゾッとするような声だった。

「それでこそ堕とす価値がある。では前戯は終わりです。そろそろわたしの産み出した調教用生物の真価を味わっていただきましょう！」

喜悦を滲ませ、パチン！　と指をひねる魔界調教師。

（なっ！？　そんな……ま、まだ何かあるというのですか……！？）

威勢よく啖呵を切ったものの、所詮は虚勢。

実際には限界、いやそれ以下だ。

すでに敗北絶頂を晒し、一度屈服した後はもうなし崩し。僅かにも耐えることが出来ず、

左右合わせればすでに十を越える絶頂を極めさせられてしまっている。今や最強の退魔師の肉体は、最下級淫魔にさえ抗えない、惨めすぎるほどに弱すぎる肉玩具に堕とされてしまっているのだ。

「く、う、うぅぅっ！　ふ、あ、ああ……ま、またイク……咲耶、またイックぅぅ！

今もなお断続的に絶頂が続き、甘い幸福感が拭えない。敗辱の証である絶頂宣言を自ら極めながら、雑魚相手に何度も何度もイカされまくる肉贄退魔師。これ以上の快楽の追加など、すでに破れてしまった風船に、さらに空気を詰めるに等しい暴行だ。

（う、うぅっ！　ダ、ダメぇ……これ以上は……も、もう……！）

そして、調教師の言う「真価」は、すぐに効果を発揮した。

「はう、く、う……あっ！？　ん、くふぅぅ……んんっ！？」

ずくん、ずくんっ！

快楽で飽和した乳房の奥で、何かが疼いた。

ひどくいやらしく、熱く、甘く、濃い――快楽をドロドロと煮詰めたような何かが、乳房の奥で、激しく律動して溢れ出しそうになっている。

「うあぁ、な、何……ツクふうぅぅぅ！？　な、なんですかこれは……わたしのおっぱい……んはあぁぁ、お、おかしい……ツクふあああぁっ！」

それは、初めて経験する感覚だった。

媚薬粘液による単純な増感や強制発情、部位の性感帯化などは、この数ヶ月で嫌というほど味わわされてきた。

だが、今乳房の奥で起きている現象は、そのどれとも違う――

今もイカされっぱなしの巨乳の奥で、何かがドロドロと渦巻き、それが溢れそうになってしまっている。

この焦燥感。この切なさ。この高鳴り。この期待感――どうしようもなく抑えきれず、胸が弾けてしまいそうなほどだ。

「乳嬲虫の粘液と触手は、ただ貴方の乳房を犯すだけではありません。より彼らが好む好餌へと、貴方の乳房を改造していたのです」

「なっ、か、改造！？　そんな、貴方はわたしの身体を、一体どこまで……ふああ、あ、あああああ～～～ッ！」

ドロッ！　と大きく溢れそうになる乳悦に内側から溶かされ、再び乳絶頂を極めてしまう敗北の退魔師。

執拗な愛撫と粘液塗布により、咲耶の乳房と乳首は、もはや自分のものとは思えないほどに感度を増してしまっている。今も乳首をネロネロとねぶりあげられただけで気をやり、イキ終わる前に乳肉を揉み込まれただけで連続絶頂してしまっているほどなのだ。

いかに強靭な意志力を持ってしても、もはやその貪婪さは抑えられない――これまでずっとギリギリで耐えきたからこそ、一度敗北の甘味を知ってしまったら、後は急速度で真

っ逆さま。一度屈服させられた咲耶の乳房は、もう、取り返しの付かない状況まで堕とされている。

すでに本人のコントロールを離れてしまった淫乱巨乳は、肉体改造された弱点と言っても過言ではない、

なのに、これ以上の改造とは――

(うあ、お、おっぱいが……溶ける、蕩ける……うぅ！　おっぱいの奥かで、何か蠢いて……あああっ、の、昇ってきます……うぅぅ！？)

ドロドロとうねるマグマのように熱い何かが、乳房の奥から湧出してくる。

たっぷりと媚薬粘液を塗り込められ、もはや一本一本が性感帯と化してしまっている乳腺を逆流し、イカされっぱなしの乳首から、どうしようもなく溢れ出してしまう――！

「クふあ、あ、ああっ！　で、出るっ……な、何か出ちゃいますっ！　おっぱい、あ、溢れ……ふあぁぁ、あっあああ～～～～～ッ！？」

ドビュッ……ドビュッ、ドビュドビュドビュドビュッ！

ドブッシャアアアアアアアアアア――――ッ！

「お、お、おほおぉおおっ！？　クほおおぉお……ツクっひいぃいいぃいいぃいいぃいぃ～～～～～ンンンッ！！」

瞬間、意識が真っ白に――いや、ミルク色に染まった。

「お、おっぱい……ひあ、あ、あああっ！？　ど、どうして……わたしのおっぱい、ぼ、

母乳なんて……んほおぉぉ、お、おほおぉぉぉ～～～～ッ！」

ミルクを噴き続ける巨美乳を上下左右に揺すりまくり、初めて味わう快感に悶絶する巨乳退魔師。

乳鰯虫の責めに屈した咲耶の巨乳は、ただ絶頂するだけでなく、母乳を噴き出しながらエクスタシーを貪ってしまっているのだ。

「うあぁぁ、ど、どうして……ひぃ、ひあ、あああぁっ！　ぼ、母乳っ……んおおおぉっまだ出てますっ、こ、これ……ふあああぁ、す、すごい……いいぃぃぃ～～～～！」

初めて味わう母乳噴射の快感は、あまりに甘美で、そして強烈だった。

豊満極まる巨美乳の奥に、溢れんばかりにたっぷりと溜め込まれた母乳を、一気に噴射する開放感。

放尿や排便などは比較にもならない、圧倒的な爽快感と放出感。

妊娠してもいないのに、子を育てるための母乳を溢れさせてしまっているという倒錯感。

そしてそれを、下級淫魔によって吸い出され、快楽を貪る道具にされているという背徳感。

（あ、ああっ……ああっ！　すごい……すごすぎます！　こんな気持ちいいの……は、初めて……です……！）

それらすべてが渾然一体とした、未曾有の超快感。

初めて味わう噴乳の魔悦に、さしもの最強退魔師も、一瞬でメロメロにされてしまって

いた。

「あさましいアへ顔だ。何百倍にも増感された巨乳から、大量の母乳を一気に噴射する「射乳」の快感は格別でしょう？　その絶頂感は、実に男性の射精の数十倍にも昇りますからね」

「う、うあぁ……そ、そんな……あ、ああっ！　こ、こんなの気持ちよくなんて……うあああぁっ吸わないでくださいっ、また、また昇ってきますっ、母乳出しながら、咲耶、またイってしまいます……ううぅ～～～ッ！」

「この魔界改造は不可逆です。母乳体質に改造された貴方の乳房は、もうわたしにさえ治療できません。これからは母乳を吹く度、この凄まじい快感を一生味わい続けられるのですよ、嬉しいでしょう？」

「そ、そんな……嬉しくなんてありませんっ！　こんな、こんなのイヤです……こんないやらしいおっぱいなんて……ふあああぁっまた出てるっ、母乳出たら咲耶すぐイっちゃう……射乳の快感、す、すごすぎますうぅ～～～～！」

言葉だけの拒絶は、むしろ無力感と惨めさをいや増すのみ。

乳嬲虫の貪欲な吸引に屈し、またしても大量の母乳を噴出する敗辱の退魔師。母乳を噴き出すたび頭の中が真っ白になり、凄まじい快楽とともに、それと同等の脱力感がどっと全身を駆け巡る。

「はぁ、はぁ、はぁぁ……あ、ああっ！　うあ、あ、あああ……！」

（ち、力が……抜けてしまいます。射乳のたび、快楽で意識が飛んで……霊力まで、どんどん、失われていっています……！）

ドロドロに蕩けかけた理性でも、自らの窮地は認知する。歴戦の退魔師ならではの分析力だが、それが窮地を救うことには繋がらない。むしろこれ以上力を失えば、状況は悪くなるのみと、暗い絶望感が募るだけだ。

「う、だ、ダメ……あ、ああっ！　こ、これ以上吸われては……うあああぁっ飲まないでくださいっ、咲耶のミルク……あぁぁ、そんなに飲んじゃダメ、ごくごく音立てて飲んじゃダメ……ぇぇぇっ！」

ごくん、ごくんごくんごくんっ！　小さな体全体を使って、ポンプのように母乳を吸いまくる淫虫たち。咲耶の乳を嬲り、屈服させるためだけに存在する人造淫魔たちの貪欲さは、その吸引に関しても健在だった。射乳中の乳首を猛烈な勢いでシゴキまくり、溢れ出す母乳を一滴残らず飲み干していく。その激しさたるや、乳管どころか乳腺そのものか吸い出すほどの勢いだ。

「うあぁぁ、つ、強いっ、乳首吸うの強すぎますぅぅっ！　そ、そんなにされたらまた母乳出ちゃうっ、ミルクどんどん昇って……んほおぉおおっまた出るっ、射乳っ、咲耶射乳でイクのクセになっちゃうおかしくなっちゃうぅぅぅ～～～！」

あまりの快感に、もう、気が狂いそうだった。

紫銀色の長髪を振り乱し、ぶるんぶるんとおっぱいを揺らしながら、射乳絶頂に悶え狂

う淫乱退魔師。最下級の淫魔の乳吸に、最強の退魔師の両胸は、もう完全に屈しきってしまっていた。

「乳蠅虫も発奮していますね。それにしても止まる気配がありませんね、流石は最強の退魔師です。その母乳は貴方の霊力が変換されたものですから。膨大な霊力が空になるまで、もっともっと搾り取れそうですね」

「はぁ、はぁ、はぁ……あ、あぁぁ！？　そ、そんな……うあああぁっ吸わないで、の、飲まないでください！　わたしの力……うあああぁっ吸っちゃダメですぅ、ぼ、母乳……うあぁぁっ許してください、もう、もう飲むの許して……えぇぇぇ～～！」

無慈悲な事実に打ちのめされながら、またしても屈服させられる敗北の退魔師。

魔界調教師の言葉が真実なのは、この尋常ではない虚脱感で理解している。そしてそれが意味するのは、あまりにも絶望的な未来図だ。

現状でさえ抵抗の仕方もわからないほど圧倒されてしまっているのに、この後はイカされればイカされるほど、霊力を奪われてしまうのだ。それはすなわち、この責めが続くほど、この快楽に耐える手段も、また快楽への抵抗力や意気さえもが失われてしまうことを意味するのだ。

そうなったら、もう、逆転など絶対に不可能――――！

（くうぅっ……ダ、ダメ……ぇぇっ！　こ、これ以上は……おっぱいでイカないようにしないと。射乳を耐えないと……力を、奪われないようにしないと……っ！）

わななく唇をぎゅっと噛み締め、快楽に負けそうになる自分を必死で鼓舞する。残り少ない心力を限界まで振り絞り、両胸に意識を集中させて絶頂を耐え忍ぼうとする――が。

「あ、く、あ、あああっ！？　ひあぁぁ、あっあああぁぁぁ～～～～！」

しゅるるる……シコ、シコシコシコシコッ！

がぶっ、ぞぶっがぶがぶくちゅるクリクリクリクリッ！

「ひ、ダ、ダメ……それダメです、それ卑怯ですぅぅぅっ！」

引きつった声で拒絶するも、当然やめてもらえるはずはない。

それはすでに暴き出されてしまった咲耶の恥ずかしすぎる性癖――こんな下級淫魔にも知られてしまっている、一番好きなおっぱいの可愛がり方。

乳房を全方位からぎゅうぎゅうと強く押し潰されながら、肉舌で乳首をシゴきあげられ、先端部をクリクリと刺激される――

一瞬で絶頂させられてしまうほどに気持ち良すぎる責め方でおっぱいと乳首を同時にイカされたら、もう一秒だって耐えられるはずもなかった。

「イ、イクッ……イキます、咲耶またイってしまいますぅぅぅ！　お、おっぱいイったら母乳まだ出ちゃいます……咲耶、おっぱいドビュドビュ出しながらイキまくっちゃいますぅぅぅ～～～～！」

あまりに屈辱的な敗北宣言、そしてそれ以上に惨めすぎるイキっぷり。

ガクンッ！　と背中が折れそうなほどに仰け反りながら、頤を突き上げて絶頂する。メ

ートル超えの巨乳がぶるんぶるんっ！　と大きく弾み、吸い付いたままの口腔から多量の母乳が吹き散らされた。

「んお、お、おおぉおっ！　ま、まだ吸われっ……うあぁっ許してください、咲耶のおっぱいもうイカせないで……はあああっまた出るぅぅ、出たらまたイっちゃいます……おっぱいでイクの止まらないっ、気持ち良すぎる射乳終わりませんンン～～～～ッ！」

イケばイクほど霊力が喪失し、快楽への抵抗力が奪われてしまう。

そうすれば淫虫の責めに耐える事など出来るはずがなく、僅かの責めで呆気なく屈服し再び絶頂。

改造された巨乳は絶頂する度母乳を噴出し、そうすればまた霊力を収奪される。その虚脱感に懊悩する暇さえなく射乳の快感でまたしても絶頂させられ――

「イ、イクッ……おっぱいイキますッ、母乳出してイキます、射乳でイキますぅぅっ！　はあぁっ飲まないでぇぇ、と、止まりません……おっぱいも、イクのも……もう、射乳でイキっぱなしなの出る出る出る咲耶おっぱい出してイキっぱなしになっちゃってますぅぅぅ～～～～～！」

ドビュッ！　ドビュッドビュッドビュドビュドビュドビュッ！

ドブッシャアアアアアア――――ッ！

「お、お、おほおぉおおッ！　クっほおおおぉおおぉおおぉお～～～～ッ！」

出せば出すほどイキやすくなり、射乳の快感がクセになって止められない。

ひときわ激しい射乳で大量の母乳を噴出し、ブリッジしたままアへ狂う敗辱の退魔師。あまりの量と勢いは貪欲な乳蠕虫でさえ呑みきれず、ぶるんぶるんと揺れまくるおっぱいから一匹の肉虫が弾き飛ばされた。

「うァ、あぁぁ、はあァァッ！　と、取れっ……ふあぁぁっまた出るぅぅぅ、お、おっぱいどんどん溢れて……ふあぁぁ、あああぁっ！」

吸引されずとも、もうクセになってしまった射乳は止められない。むしろ栓を失ったことで、溜まっていたものがすべて乳腺から溢れてしまう。

「は、あぁ、あぁぁ！　イクッ……咲耶、また母乳でイク……ううぅぅ～～～っ！」

顕に晒された乳首の桜色を白濁に染め上げながら、終わりなき射乳絶頂に耽溺する。久方ぶりに肉虫から解放された右乳房で感じる開放感に打ち震えながら、今もなお執拗に吸引を続けられる左乳房での搾取に変わらず屈服。左右それぞれで感じられる別種のエクスタシーのギャップたまらない。

「お、おほおぉぉ……お、おぉぉっ！　クはあぁ……あ、あぁぁ……あぁぁぁ……あぁァァっ！」

仰け反り絶頂で天を向いた豊満美乳から、とめどなく噴き出し続ける射乳の様子は、まるで白いマグマの噴火だ。あまりのエクスタシーに咲耶が意識を失った後も、とめどなく母乳は溢れ続けていた。

「なんと、乳蠕虫でさえ吸いきれないとは。なんと膨大な霊力なのでしょう……想像以上

だ。やはり、貴方は恐ろしい人ですね円城咲耶」

溢れる母乳と汗と涙と愛蜜で出来たプールで、びちゃびちゃと跳ねるしか無い哀れな肉虫を、魔界調教師は片手で拾い上げた。

「いいでしょう。貴方の膨大な霊力、そのすべてが失われ、快楽の奴隷になることを自ら懇願するまで……その淫らな肉体、たっぷりと時間をかけて調教して差し上げます」

ブチュッ！　役立たずの調教生物を握り潰し、その場を後にする淫魔の首魁。その声が聞こえているのかいないのか、咲耶は今もなお終わらない射乳のエクスタシーに、ブリッジ姿勢のままイキ続けるのみ。

だが――

「ク、クあぁぁ……あ、ああっ！　クふうぅ……く、う、うぅぅ……！」

（ま、負けない……負けませんっ！　どれほどこの身を汚されても……どれほど淫らに改造されようと……身体を堕とされようと！　こ、この心だけは……絶対に、渡しませんから……！）

連続絶頂状態で半ば喪心しながらも、心の中では戦いをやめず、未だに堕ちることはない。

その気高い魂をこそ、魔界調教師は認め、そして笑った。

「この魔界調教師の名に賭けて、必ずや堕としてさしあげますよ。最強の退魔師……円城咲耶」

凌辱者から解放されてなお、断続的に母乳を吹き続け、貪欲に快楽を貪り続ける咲耶の巨乳を睨めつながら、魔界調教師は静かに笑う。

淫魔の虜囚に堕ちし、最強の退魔師――円城咲耶。

彼女の魂を堕とすための魔界調教は、まだ、はじまったばかり――

二章　触手摩擦無限地獄

「んんっ……んふ、んあ、はっ！　くぅ、は、ああ……んんんっ！」

ぬちゃぬちゃ、にちゃにちゃ……ぞるるる……！

濡れた肉と濡れた肉とが擦れ合う、卑猥な摩擦音が響き渡る。

常に降りしきる粘液の雨、膝上にまで溜まった白濁粘液のプール。

高温多湿な水場に、艶めかしい嬌声が、ひどく淫らに反響する。

「うあぁ、ま、またコスれっ……くふぅぅんっ！　こ、こんなもの……い、いつまで続ける気なのですか……あ、あああ！」

魔界調教師による新たな調教は、次々と咲耶を襲う。

この新たな調教部屋に密閉されたのは、もう五日前になる。

大量の媚薬粘液でぬかるんだ肉窟に拘束された咲耶を待っていたのは、自身よりも遥かに長く太い触手による、執拗極まる全身摩擦愛撫だった。

「くふあぁ、あ、ああっ！　こ、コスれるっ……コスれていますっ。そ、そこ……また……ひうぅ、く、くはぁ……んんっ！」

ぬちゃぬちゃ、ずるずる……ぞりりりり……！

肉イボまみれの触手に背筋を摩擦され、別の太肉に腹部もコスられる。

両手を頭上に縛り上げられヒップを突き出した屈辱的すぎる敗北ポーズで拘束されたまま、咲耶は二匹の太触手によって身体の前後をサンドイッチされ、絶え間ない前後運動

でひたすらにブラッシングされているのだ。

「うあぁ、く、食い込み……っくふうぅぅ！　そ、そこ……あはあぁっダメです、お、おっぱいは弱いのに……ふあぁ、くふうぅぅんっ！」

身体を支えるように腹部側にあてがわれた触手の太さは、まるで丸太だ。そんなものを両太ももに跨がらされ、伸ばされた先端部はお臍やお腹を擦りながら、豊満な巨乳の谷間にまで届いている。人一人分の体重がかかった触手丸太は、当然、咲耶の身体に深々と食い込んでいた。

「ふ、く、うぅぅっ！　きつい……く、食い込んで……はう、く、うぅぅんっ！」

深々と挟み込まされた両太ももに、その奥で火照りっぱなしの女陰。グィグィと太肉が食い込まされ、表面に生えた肉疣に秘唇を抉られる。お腹にもべっとりと粘液を塗り込められながら密着し、蠢く肉イボにお臍の窪みをいやらしく擽られた。悶えるたびにだぷん！　だぷん！　と量感たっぷりに揺れるメートルオーバーの巨乳果に挟み込まれた亀頭部は、そのの柔らかさと質感に喜悦し、まるでいきりたった男性器さながらに激しくピストンを繰り返していた。

「うあ、く、ああっ！　う、動かないでください……はぁ、はあぁっ！　そ、そんなに激しく動かれたら……余計にコスれて、食い込んで……ぇっ！」

ずちゅっ、ぬりゅ、ぐちゅっ……ぞりゅりゅりゅりゅっ！

激しく前後運動を繰り返す肉丸太に、前半身すべてを摩擦された。大量に密生した肉イ

ボはまるでブラシのような細かさで、咲耶の媚肉をつぶさにコスり、媚薬粘液を塗り込めながら丹念に磨き上げてくる。天井から滴り続ける白濁と、触手そのものから吹き出される粘液が、それぞれローション代わりになって摩擦マッサージの快感をいや増していた。

「うあ、し、しつこい……しつこすぎます……うぅうっ！　こ、こんな……何度も何度も……丁寧に……うあぁっ！　ヌルヌル……イボイボ……コ、コスれて……うあぁっ、こ、この動き……ダメです……ぅぅうっ！」

数万にも及ぶ肉イボが別個に蠢き、媚薬まみれの全身をひたすら執拗にもみほぐされる。まるで、無限軌道の触手の海に漬け込まれ、全身を同時にマッサージされ続けているかのようだった。ドロドロと天井から溢れ続ける白濁液のヌルヌルが、肉イボ丸太の摩擦快感をいっそう甘美なものへと倒錯させる。

「くうっぅっ……だ、だめ……だめです！　こ、このような快楽……くうぅぅ、な、流されるわけには……っく、ふうぅぅっ！」

終わりなく続く摩擦快感にゾクゾクと身悶えながら、なんとか理性を保とうとする。

だがこの肉部屋での調教は、肉丸太による前面への摩擦だけではなかった。

「はぁ、はぁ、はぁぁ……ふうぅっ！？　うあぁ、そ、そっちは……背中……ふあああぁぁっ！」

ぬりゅ、ずりゅ、ぬりゅりゅりゅりゅりゅりゅっ！

背中側に押し付けられていたもう一本の肉触手が、力強く前後運動を開始する。

お側に食い込まされた肉丸太よりも扁平で、肉イボは生えておらず、単純な造形だ。しかしその分みっちりと肉厚で、ひどく力強く、逞しい。その存在感たるや、こうして密着させられているだけで、ドキドキと咲耶の中の牝性が疼いてしまうほどだった。

力強い肉丸太の動きは、剛健な造形以上に複雑で、心地よいものだった。

獲物の背中を舐め、背筋のくびれをこそぎ、尻谷に食い込んではしゃぶってねぶって味わい尽くす。その様は、美食を味わい付くさんとする貪欲な舌そのものだった。

「うぁ、だ、ダメです……ふあ、あ、あああっ！　触手動いてっ……ふあああぁっヌルヌルしないでくださいっ、そ、そこっ……うあぁっお尻食い込むぅぅ、せ、背中なぞるのっ……はぁぁ、それ……だ、だめ……ぇぇ！」

屈服ポーズで突き出されたお尻から、綺麗に整った背筋のラインを一舐めされ、さらにはうなじに至るまで――人間一人の背面を軽々とカバーする長大なストロークで、何度も何度もコスされる。その度、こそばゆさを伴う快美感が、ゾクゾクと背筋を震わせて止まらない――

（う、うぅっ！　こんな……おぞましい触手に背中を擦られて……あ、ああっ！　こんなものが……き、気持ちいい……なんて……！）

それは、咲耶自身知らなかった性感――これまでの責めでは嬲られてこなかった場所だった。

だが、それも当然だろう。

咲耶の肉体は、あまりにも蠱惑的すぎる媚肉の宝庫だ。そして、淫魔とは欲望の化身だ。抑えきれぬ肉欲のまま、凌辱者は乳房や臀部といった魅惑的すぎる弱点にむしゃぶりつき、あるいは秘唇や口唇、アナルといった肉穴へ肉棒を打ち込まざるをえなかったのだ。

しかし、魔界調教師による再調教で、咲耶は思い知らされることとなった――そのようにわかりやすい弱点ばかりではない。自分の身体は、どこもかしこもが敏感な、破廉恥すぎる全身性感帯だったのだと。

「ふうぅ、く、ううぅっ！　ち、違う……違います。わたしは……こ、こんなもので感じたりしません！　こ、こんな場所で……背中やうなじを舐められて、快楽を覚えたりなど……ふああぁ、あ、あああぁっ！」

ぬるん、ぬりゅっ、ずりゅりゅりゅりゅりゅりゅっ！

ぐちゅっ、ずりゅっぬりゅっぬりゅりゅりゅりゅりゅりゅ！

「うあ、あ、あああぁっ！　ダ、ダメです……それだめぇ、そこ、そんな……あああぁっ！せ、背中ヌルヌル舐めちゃ……首筋も弱いのにっ、せ、背筋沿うように何度も何度もつつつ～～って……うあぁぁ、それ、ダメなんです……うぅぅ～～～！」

ビクン！　と背筋を仰け反らせ、紫髪を振り乱して泣き叫ぶ。無意識のうちに自ら弱点を肉舌に押し付け、さらなる快楽をねだってしまう淫乱退魔師。豊満なヒップはもちろん、背筋のくぼみや首筋を蕩かせる快美感を否定できず、端正な美貌はあさましく蕩けきってしまっていた。

（うあぁ、こ、こんな……こんなぁっ！　し、知りませんでしたっ……わ、わたしの身体……こんなに快楽に弱かったなんて。背中をつつーってされたり、首筋を舐めしゃぶられたり……こんな快感、し、知りたくなかったのに……いぃぃ！）

自分でも知らない性感をつぶさに暴き出され、可愛がられ、開発し尽くされるされる――それは咲耶を屈服させるためだけに魔界調教師が仕組んだ、十年後越しの奸計。

その偏執的とも言える執念に、最強の退魔師は、身も心も圧倒されていく――

「……ッ！」

（ち、違う……違いますっ！　わたしは、まだ負けてなどいません。このようにおぞましい快楽になど、絶対、屈したりしません……！）

媚薬粘液とよだれとで濡れ光る唇を、ぎゅっと強く噛みしめる。

蕩けるような肉悦の只中にありながら、咲耶は、まだ最強の退魔師としての誇りを失っていなかった。

あらゆる性感帯を暴き抜かれ、専用の媚薬に漬け込まれ、弱みという弱みを徹底的に虐め抜かれる――常人なら廃人になって当然の快楽地獄に落されながら、決して諦めずに抵抗を続ける。

この肉部屋での摩擦愛撫も、もう、数日間も続いているのだ。

それなのに、咲耶は――

「ふぅっ……く、ううぅっ！　ふうぅぅ……く、ん、んんんん～～～！」

縛り上げられた四肢をプルプルと痙攣させ、なんとか力を込めて踏ん張る。ぎゅっと唇を噛み締めて、漏れ出す嗚咽をすんでのところで噛み殺す。

「んふぅぅっ……く、ふ、くうぅぅっ！　ふああ……く、ん、んんん～～～！」

端正な美貌を切なげに歪ませながら、必死で流されまいとする苦境の退魔師。もはや風前の灯でありながら、ギリギリの際で耐え続ける。

それは人間離れした、驚異的な克己心のなせる業だが――

どれだけ耐えようと、囚われの退魔師に、決して開放は訪れない。

この孤独な淫戦に終わりはない。

そして、勝利など決してありえないのだ。

「ふうぅぅっ……く、ふ、ああっ！？　うあぁ、つ、強いぃぃ……背中っ、そんなに強く押されたら……ふあぁ、あ、あぁっ！」

ぐにゅうるるる……グイッ、グイグイグイッ！

巨大な肉舌による背面への刺激は、前後への摩擦だけでない。肉舌全体で背中のくぼみを穿るようにされながら、グリグリと力を込めて抉られた。それだけでも甘美な刺激が脊椎を震わせるが、それがもたらすのは単純な快感だけではない。

真上から直下方向に力をかけてグッと押し込まれれば、当然――

「ダ、ダメ……はぁ、っくうぅぅっ！　そ、そんなにグイグイ押されたら、つ、潰れて……ふあああぁ、イボイボ触手がっ、く、食い込み強くなって……クひぃぃ……ンンッ！」

背面から押し込まれた分、真下で体を支えていた肉丸太に、前半身がグッと押し付けられる。肉丸太を挟み込んでいた両太ももが大きく開かれ、さらに深奥まで食い込まされた。柔らかなお腹に数百もの肉粒がめり込み、お臍の窪みのいっそう深くにまで突きこまれる。それだけでも増した快感は凄まじく、思わず甘い嬌声を上げてしまった咲耶だが、真に甘美だったのは一番の弱点への追い打ちだ。

「うあぁ、お、おっぱい……うあぁぁ、だ、だめぇ！　おっぱいの間に食い込んで……だめですっ、そんな……強い……いぃぃっっ！」

むにゅっ……むにゅ、ぎゅううっ！

悶えるたびにぶるんぶるんと揺れまくるたわわな双乳の谷間に、これまで以上に深く、強く、激しく。

野太い肉舌触手の先端部が、両の乳房を左右に押しわけ、奥の奥にまで食い込まされる。

（ダ、ダメッ！　む、胸は……おっぱいは、よ、弱すぎるのに……っ！）

この調教でも教え込まれた背筋やうなじといった性感帯。今もグリグリと肉舌に抉り込まれ、力強い抽送で摩擦されるのは、もちろん泣きたくなるほどに気持ちいい。

だがやはり、それでも――

一番感じてしまう、一番気持ちいい、一番どうしようもない弱点は、やっぱり――！

「お、おっぱい……ひぃん、ックひいぃぃんっ！　クはあぁぁっおっぱいだめぇぇ、わたし、む、胸は……おっぱいは弱すぎて……クひいぃぃんっ！」

ずりゅ、ずりゅ、ずりゅりゅりゅりゅっ！

力強い抽送で、乳谷の奥まで丁寧に磨きかれる。たわわな肉房はそのたびぶるんぶるんと揺さぶられ、気も狂わんばかりの乳悦が木霊する。

（うあ、あ、あぁ、あぁっ！　ダ、ダメです……おっぱいは……！　そ、そんなにされたら、また母乳溜まって……どんどん、敏感になって……！）

豊満極まる両乳房は、媚薬性液漬けで感度を増しすぎている女体の中でも、特に鋭敏な弱点だ。もともと敏感だった上に、魔界調教師による調教と乳蠅虫による肉体改造により、咲耶の両胸はさらに天井知らずに感度を増してしまっている、どうしようもない弱点に躾けられてしまっているのだ。

極太触手を挟み込まされているだけでも欲情してしまい、その太さと長さにメロメロになってしまっている乳房を、こんなに力強く摩擦され、揺さぶられたら――

背中側から極太肉舌でグイグイと押し込まれ、細やかな肉イボを逆側から食い込まされ、疼く乳肌を磨き抜かれたら――

「くはぁぁ、だ、だめっ……イクッ、またイクッ！　咲耶、またおっぱいでイってしまいます……咲耶、極太触手におっぱいイカされてしまいますぅぅぅ～～～～！」

誰も見ていない肉部屋でも、調教の成果たる恥ずかしすぎる絶頂宣言は止められない。

改造された乳房の中でドロドロと渦巻く快楽ミルクが乳腺を逆流し、たまらないエクスタシーと同時に噴き上がる――――が。

「イクッ、イクッ……イ、イいぃぃっ！？　うあぁぁ、ど、どうして……どうして、止まってっ……」

背中側の肉舌と、乳谷と太ももに食い込まされた肉丸太。あれほど激しく蠕動を繰り返していた2本の極太触手は、ピタリと動きを止めてしまっていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……あ、あぁぁっ。クはあぁぁ……ん、んん……！」

もうイキかけていた――いや、意識はもうすでにイっていた。両乳房は淫らに熱を持って蕩けきり、心臓はドキドキと早鐘を打ち続けている。ビンビンに勃起しきった乳首は母乳を吹けなかった焦燥感で、壊れてしまいそうなほどだった。

（くうぅ……や、やっぱり……！　ま、まだ焦らすつもりなのですね。ま、また……ギリギリのところで動きを止めて……ああっ。こうして、生殺しのまま……ずっと……！）

はぁはぁと物欲しげに喘鳴を零しながら、欲求不満の身体を震わせる咲耶。子宮は限界まで降りきっているのに、決定的な絶頂の瞬間でお預けされたものだ。

そのもどかしさと切なさたるや、もう、気が狂ってしまいそうなほどだった。

「はぁ、はぁ、はあぁ……ックうぅぅ！　ふ、あ……あ、あああ……！）

（ど、どうして……こんな、もう何度目……いえ、何十回目なのですか。こんな……寸止めばかり、何日も、ずっと……おぉ！）

これこそ、この調教のもっとも卑劣な陥穽だった。

高濃度の淫気が満ちた肉部屋に密閉され、四肢を拘束された恥ずかしすぎる屈服ポーズ

のまま、２本の肉触手で身体をサンドイッチされてひたすらに磨かれ続ける全身愛撫――この責めを続けられて、もう五日にもなる。

だがその間、咲耶はただの一度たりとも絶頂させられていない――否。

絶頂させて、もらっていないのだ。

「ク、クうぅぅ……はぁ、はぁ、はあぁっ！　こんな、こんな……クぅ、ふ、うぅぅ……ンンッ！」

（こ、今度は……イケそうだったのに。おっぱいは弱いから……おっぱい、触手ブラシでゴシゴシされて……もう、殆どイってしまっていたのに……！）

「はぁ、はぁ、はぁ……はあぁっ！　うあぁ……く、ふ……んん……ん！」

切ない。

切なすぎる。

自分でも知らなかった性感帯を暴き抜かれ、様々な快感を教え込まされたのに、そのどれでも満足させてもらえない。

乳嬲虫に開発され、何千倍もの感度にまで高められた射乳体質の乳房でさえ、一度も射乳を許されず、イカせてもらえていないのだ。

「クうぅぅ……ふ、ん、んんっ！　クふうぅ……う、うぅぅ……！」

目を瞑り舌を突き出し、物欲しげに喘ぐ淫乱退魔師。

魔界調教師による乳改造で屈服絶頂グセを付けられた後に、今度は徹底的な生殺し――

屈服絶頂の甘美さを知ってしまった堕ちた女体にとって、それは、あまりに残酷すぎる仕打ちだった。

「はぁ、はぁ、はぁ……う、あぁぁっ！？　いやっ、ま、また動いて……ックふあああああっ！？」

ぬちゃ、ぐちゃ。にゅるっじゅるるる……！

絶頂の波が引くか引かないかの絶妙な頃合い――当然、このバイオリズムも魔界調教師より暴かれ、触手淫魔にインプットされている――を狙い、肉舌たちが動き出す。

愛蜜まみれの股間をぐちゅぐちょと刳られながら、お腹とお臍を擽られ、今もドキドキと高鳴り続ける欲求不満のおっぱいをゴリゴリと擦られる――

「ふあぁぁ、あぁぁ、あぁぁっ！　お、おっぱい……んはあぁぁっ擦れるっ、イボイボ触手食い込んで……ふあぁぁ、ックひいぃぃんっ！」

お預けされっぱなしのイキかけ媚肉を、再び刺激されてイカされかける。なんとか引いていた絶頂の熱がすぐにぶり返し、おっぱいの奥に淫らな熱が溜まってしまう。

「うあぁ、お、おっぱい……母乳、また溜まって……ひぁぁっ！　イ、イクッ……咲耶、おっぱい出しながらイっ……ふあぁぁ、ま、また……あぁぁ～～～！？」

またもイク寸前、いや半ばイキかけていたのに。

触手舌は今までの動きが嘘のように蠕動を止め、微動だにしなくなってしまう。

「うあぁ、イ、イケない……咲耶イケないっ、またイケないぃぃっ！　こ、こんなぁ…

…また生殺しなんて……ふうぅぅ、く、うううぅ〜〜〜〜！」

ビンビンに勃起した乳首から先走りの母乳をトロトロと零しながら、物欲しげに泣き悶える。おっぱいに母乳が溜まって乳腺が張り詰めているのに、それを吐き出すことさえ許されない——射乳寸止めのもどかしさに、咲耶は長髪を振り乱して啼泣した。

「はあぁ、こ、こんな……どうして、どうして……ぇぇっ！　も、もうイキかけてたのに、イケそうだったのに……ふあぁぁっひどいですっ、こんな、っこんなの……ックふあぁ、あ、あぁぁあ〜〜〜っ！？」

ぞりっ、ぞりっぞりっぞりっ！

今度は背中側を舐められ、背筋をコスられうなじをしゃぶられた。性器への責めですらないのに、それだけでもあっけなく達してしまいそうになるも、やはり肉舌はその直前で動きを止め、決して開放を許してはもらえない。

「うあぁ、そ、そんなぁ……止まった、また止まった……あぁぁっ！　イ、イケないっ……イケそうなのに、イキかけてたのに……何度も何度も、こんな、こんな……あぁぁぁ〜〜〜〜ッ！」

連続絶頂で飛ばされ続ける快楽地獄よりも、なおも辛く、苦しい。

天国を目の前にしながら、決してそこに辿り着けない無限地獄は、調教済みの淫乱ボディにとって、これ以上ないほどの苦しみだった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はあぁッ！　ひいイインッまた動いてますっ、こ、今度は両方一緒

……ふあああぁっコスらないでくださいっ、前も後ろも一緒なんて……こんなにコスられたら、咲耶、またイッ……！」

両太ももに食い込まされた肉丸太を動かされ、無数の肉イボに陰唇を抉られる。野太い肉舌に尻たぶを押し開かれ、腸内に響くほどの強さでアヌスを圧搾された。前後の肉穴それぞれに伝わる別種の刺激が、共鳴しあって得も言われぬほどのエクスタシーが駆け巡る。

が――

「うあぁ、イ、イクッ……イケないっ、咲耶またイケないぃっ！　こんなぁ、ど、どうして止まってしまうのですか……も、もうイケそうだったのに、お尻もあそこも、もう殆どイキかけてたのに……いぃぃ～～～～！」

もうひとシゴキで。もうひとコスリだけで。たったそれだけで、子宮もアナルも達してしまっていただろう。

それなのにまたしても動きが止まり、イカせてもらえない。

イケそうだったのにイカせてもらえず、欲求がたまってたまってどうしようもない――！

「うあぁぁ、こ、こんな……許して、もう許してくださいっ！　イ、イキたかったのに……咲耶、イカせてほしかったのに……ふあ、あ、あああああ……！」

狂おしいほどのもどかしさの中、いやいやと首を振るって懊悩する。自らカクカクと空腰を使い、あるいはお尻をはしたなく突き出して快楽を求めるも、肉触手はその分引いて

接触さえ許してもらえない。かと思えば次の瞬間にはまた肉イボをざわめかせ、微細な振動でお腹とお臍を擽られるのだ。

「ひぃぃンッ、それ、それ……ふあぁぁっ！　イ、イっちゃいそう……お腹なんかで、お臍なんかで……ひあぁぁっ！　あぁぁっ今度こそイケます、さ、咲耶……ふあぁぁっまたイケないっ、焦らされてイカせてもらえないぃぃ～～～！」

絶頂寸前でピタッ、と動きを止められ、絶頂の波が引くまでまたしてもお預け。息が整う暇もなく、また摩擦されてイカされかけ、かと思えばまた動かなくなっての生殺し――

「うあぁ、イ、イカせて……こんなぁ、もう許して、もう許してくださいっ！　さ、咲耶イキたいんです、なのにこんな……うあぁぁっまたおっぱいイキそうっ、でもイケないっ、母乳ぱんぱんに溜まって出ちゃいそうなのに……うあぁぁ、まだ焦らされてイカせてもらえないぃぃ～～！」

終わりなく続く寸止め地獄。朦朧とする意識の中、もはや最強の退魔師としての誇りさえかなぐりすて、触手相手に慈悲をおねだりしてしまっていた。

「イ、イカせて……お願いします、イカせてくださいぃぃっ！　も、もう焦らすの許してください、こ、こんなのおかしくなっちゃう、イキたいのにイケないのもどかしすぎて、咲耶、狂っちゃいますうぅぅ～～～～！」

イキかけの巨乳をぶるんぶるんと揺すりたくり、カクカクと空腰を使ってお尻を振りたくり、あさましい屈服の声を上げる淫乱退魔師。物言わぬ触手相手に「イカせて、イカせ

てください」と哀願するその姿は、気高き退魔師と同一人物とはとても思えないほどに無様だった。

「うあぁ、はぁ、はぁ、はあぁあっ！　んはあぁっイクッ、あそこも、おしりも、おへそも背中もおっぱいも……イ、イッ……イケないぃぃ、やっぱりイカせてもらえないぃぃ～～～！」

だが、どれほど哀願しようと、触手たちは決して咲耶に慈悲をくれなかった。

何十、何百、何千もの絶頂が、目の前までぶら下げられては、儚く消え去っていく。

淫乱に開発された肉体にとってもっとも残酷な、絶頂寸前でのお預け地獄。

高潔な退魔師の心をへし折る、無慈悲極まる寸止め調教は、それから何週間もの間続くのだった――。

幕間

「はぁー。はあぁ――、はぁ、はあぁ――――――」

あれから、どれだけの時間が経過したのでしょう――

ただただ辛くて、切なくて、もどかしくて――

もう、頭がおかしくなってしまいそうなぐらいです。

時間の概念など、とっくになくなってしまっていました。

「う、あ……あぁ。はぁぁ……あ、ああ……」

気づけば、わたしを嬲っていた――いえ、寸止めで生殺しにしていた触手たちは、その姿を消していました。

新たな刺激はないので、絶頂の誘惑をちらつかせられることはありませんが……それでも、何百何千という生殺しのエクスタシーは身体の中に溜まったまま、

欲求不満の肉体は切なく疼き続け、乳房の奥では吹き出せなかった母乳が溜まってずっしりと重みを感じます。

「ふううぅ……く、うぅぅ。はぁ、はぁ、はぁ……」

(終わった……の……ですか？　それとも、これも……わたしを焦らす、調教の一環でしょうか……)

そんなはずはありません。

何も終わってなどいません。

何もされなくても、わたしの身体は、ずっと飢え続け、苛まされているのですから。
ですが――
（と、とにかく……今のうちに……何とか気を整えないと……）
「すぅ……ふ、うぅぅ。はぁ……ん、んん……」
甘く溢れそうになる呻きを噛み殺し、深く呼吸をします。
周囲には高密度な媚薬と淫気が満ちていて、清浄な気など望むべくもありませんが――
それでも、何もしないよりはマシです。
「はぁ、はぁ、はぁ……すぅぅっ、ふぅ……はあぁ……ん、んん……」
気を蓄えて精神を集中し、心身を落ち着かせる、円城流の呼吸法。
生殺しにされ続けていた肉体の欲求不満はこんなもので騙せるはずもありませんが、それでも、なんとか理性の欠片を呼び起こし、正気を掘り起こしていきます。
「ふむ、流石ですね。触手たちに絶頂をおねだりしているのかと思えば、反撃の機会を伺っているとは。いやはや、流石は最強の退魔師。感服しましたよ」
「……貴方ですか」
慇懃無礼な声……これを聞くのも何日ぶりかわかりません。
久方ぶりに他人と言葉を交わせることが嬉しかったのでしょうか……わたしは、自分でも気づかぬ間に声を返してしまっていました。
「魔界調教師……っく！　ざ、残念でしたね……わたしはまだ堕ちていませんよ。見込み

違いでしたね……あの程度の生殺しで、わたしを屈服させられるなどと……はぁ、はぁ。決して、思わないことですね」

言葉をやりとりする意味など、ないとわかっているのに。

わたしは、強気に啖呵を切り、この男を挑発さえしてしまっていました。

「おお、おお。息も絶え絶えというのに、なんという胆力。素晴らしい……貴方こそ我々淫魔の大敵。最強の退魔師の名に偽りはありませんね」

「っ……大敵である淫魔に褒めそやされても、嬉しくなどありません……！」

「そうですか。でもこれはどうでしょう？　喜んで頂けると思うのですが」

「……ッ！？」

四肢を拘束されたまま、身構える事もできませんが、わたしは緊張感を漲らせました。

（また……何か、する気ですね。何か新たな淫魔をけしかけて……さらなる快感で、わたしを、嬲る気なのですね……！）

不安と恐怖、そして否定しきれない被虐の期待感に、ズキン、と胸が疼きました。

ですが齎されたのは、意外なものでした。

「え……あっ……！？」

ずる……ん。腕を吊り上げている触手が離れ、両足も拘束が解かれます。そのまま粘液の海に倒れ込んでしまいそうなところを、なんとか踏ん張りましたが……それだけでも秘唇から愛蜜が溢れてしまい、「ああっ」と悶え声を抑えられませんでした。

そんな無様すぎるわたしに、魔界調教師は、予想だにしていなかった代物を手渡してきました。

「さぁ、受け取ってください。ここまでわたしの魔界調教を耐えきった、名実ともに最強の退魔師にこそ、これは相応しいものですから」

「っ……これは……」

汚れ一つない白無垢の生地。

この空間に似つかわしくない、清浄な霊気。

それは、わたしが普段着用している、純白の霊衣でした。

「……何のつもりですか？」

触れずとも感じる、高純度の神気。それは間違いなく、わたしの専用の戦闘コスチュームです。

ですが、このような……敵地で用意されたものなど、罠に決まっています。

「罠ではありませんよ。わたしはこれを貴方に着て頂きたいのです。だから用意したのです」

魔界調教師は静かに語ると、傍らに控えていた乳蠅虫をつまみ、白い生地に近づけました。

それだけで下級淫魔はギィイイッ、と悲鳴を上げ、白煙を上げて焼け焦げました。

「ほら、この通り。下級淫魔では触れることすらできない、厄介な代物です。わたしとて、

こうして手にしているだけでも辛いのですよ。ささ、早く受け取ってくださいませんか」
「……なぜです。なぜ、このような真似を……？」
「言ったはずです。これは貴方にこそ相応しい衣装だと。そして、わたしが堕とすべき女性には、もっとも美しく似つかわしい衣装を着ていて欲しい……それがわたしのポリシーです」
「……」
この男は、いったい、何を言っているのでしょう？
まったく理解が出来ません……ですが……
「良いのですか？　わたしがその衣を纏えば、下級淫魔程度では触れることすらできなくなるのですよ」
「ええ、それは確かに手痛いのですが。しかしそれ以上のメリットがわたしにはありますので、お気になさらないでください」
「わかりません。貴方に、何のメリットが？」
「言ったでしょう、ポリシーの問題です。美学と言ってもいい」
魔界調教師は、誇らしげに胸を張りました。
「咲耶さん。貴方はこの霊衣を着用してこそ、もっとも強く、そして美しい……最強の退魔師の姿となるのです。そして、そんな完璧な貴方を、完膚なきまでに淫らに堕とす。これでこそ、最強の退魔師円城咲耶を完全に屈服せしめたと言えるのです」

「……変態ですね、貴方は」
「まぁ、人間の価値観ではそうなるかもしれませんね。ですがこれが、淫魔としての性ですので」
あまりにも意味の分からない、狂人の理論……変態的な欲望に、嫌悪感が走ります。
ですがそれ以上に、わたしは、怒りを抑えられませんでした。
「つまり貴方は、霊衣を纏った完全な状態のわたしをも堕とせると、そう言いたいのですか？」
「流石に聡い」
「……巫山戯た事を！」
これは、侮辱です。
退魔師としての誇りを蔑む、最悪の皮肉です。
一度力を奪った相手に、再び反撃のための装備を与えて、また弄ぼうなどと……
その程度では何も変わらない。簡単に屈服させられるだなどと……！
（なんという侮蔑。なんという屈辱……！）
わたしは、歯噛みしました。
そして、湧き上がる怒りと誇りに任せ、魔界調教師の差し出した霊衣を手に取りました。
「おお、その気になってくださいましたか」
「いいでしょう。挑発に乗ってあげます。どうぞ、これを着たわたしを好きなようになさ

い」

「いえいえ、挑発など滅相もない。これは頑張った貴方へのご褒美。調教を耐えきった貴方への、わたしからの経緯の現れです」

「その余裕……後悔することになりますよ！」

殴勲無礼な物言いに、わたしも思わず声を荒らげてしまいます。

その焦燥を誤魔化すように、手にした霊衣を、わたしは身につけました。

「んっ……ふ……！」

長年に渡り愛用してきたコスチュームの、着こなれた着用感。ぴっちりと肉体にフィットする心地よい感触に、思わず甘い声が出てしまいます。

「ふっ……ん。ん……ふっ……！」

今も母乳が溜まったままの、淫らに改造された両乳房。ギリギリのサイズに締め上げる窮屈さが、ひどく心地よく感じられます。

粘液まみれの腹部や、ひくつきっぱなしの陰唇も、白く清浄な生地に覆われて、その淫らさから目を背けることが出来ました。

（……確かに本物ですね。身につけただけで、清浄な神気が伝わってきます……）

もちろん、それだけで回復できるわけでも、この空間に満ちる濃厚極まる淫気をシャットダウンできるわけでもありません。

ですが……この薄布一枚だけでも。

わたしは、万の援軍を得たかのような心強さでした。
「素晴らしい。なんと美しく、そして気高い退魔師の姿。やはり貴方には、その衣装がお似合いです」
「褒め言葉など不要です。ですが、感謝の言葉は述べさせてもらいましょう」
「ほう、それはそれは」
「これで貴方の勝ち目はなくなりました。勝利を手渡してくれて、ありがとうございます」
「ふふ。強気な眼差しだ。気高さと気丈さも戻りましたね。それでこそ、ああ、それでこそ……！」
わたしの言葉を受け、魔界調教師は、さも嬉しそうに身体をくねらせました。
「最強の退魔師、円城咲耶。本当の貴方を堕とす勝利感が得られるというものです！」
ごぽっ……ずる、ざぱぁぁぁぁんんっ！
「ッ！？」
足元の粘液が泡立ち、巨大な触手が出現しました。
体を動かすよりも早く、わたしは両足を絡め取られ、その場に引き倒されてしまいます。
「くっ！　し、しまった……きゃあああああっ！」
どぷっ、ざぱぁぁぁぁんっ！
粘濁の池が飛沫を上げ、全身にかかってしまいます。
両足に絡みついた触手は凄まじい怪力で、今のわたしでは、その拘束から逃れることは

出来ません。

「さて、では始めるとしますか」

ぬりゅ、ずりゅりゅりゅりゅっ……！

天井から、巨大な触手が伸び出してきました。

これまでわたしを嬲っていたものよりも、数段太く、長く、そして卑猥な……勃起した男性器を模したような、淫猥極まる巨大触手です。

「うっ……あ……！」

剥き出されたピンク色の亀頭が、わたしの股間へ近づいてきます。

その存在感と淫気だけで、秘唇が反応してしまうのがわかります……しかし。

「む、無駄です。今のわたしには……その程度の淫魔では、触れることさえ出来ませんよ！」

そうです。

淫らな期待感に疼いてしまってはいますが……

これまで生殺しにされてきた肉体は、淫らな期待感に震えてしまっていますが……

（大丈夫……大丈夫です。今のわたしには、霊衣の守護があるのです。この程度の淫魔の触手など、通じるはずがありません……！）

「ふふ。そう。今の貴方は紛うことなき最強の退魔師。ですが……だからこそ。それを快楽で堕とし、屈服させてこそ意味がある！」

「くっ！　やってみなさい……出来るものならっ！」

キッ！　と強気に触手を睨みつけ、わたしは吐き捨てます。
そうです。
無駄です。
何をされても、わたしは、決して負けません。
堕ちたりしません……屈服したりしませんッ！！